

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	児言態を追いかけて
Auther(s)	難波, 博孝
Citation	児童の言語生態研究 , 16 : 21 - 22
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045188">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045188</a>
Right	
Relation	



## 特別寄稿

# 児言態を追いかけて

広島大学助教授 難波博孝

1999年5月ごろ、私は当時神戸大学に勤められた浜本純逸先生から3冊の雑誌を渡された。その雑誌の題名は「児童の言語生言態研究」であった。私は、1999年4月から半年、当時勤務していた愛知県立大学を離れ、神戸大学に半年の内地研究に出ている。私の仕事は、まもなく退官される浜本先生の文献目録を作ることであった。私は、その年の2月に説明文に関する研究を博士論文にまとめたのであったが、その前から自分の論文をまとめることが苦痛になりかけていた。「こんなこととしていけない」という気持ちだが、論文をまとめている間に、ずっと心の中にわき上がっていた。自分の説明文に関する研究が、全く無駄なものとは思っていない。けれど、今現実に国語教室で起こっている事態には、私の論文はとてども遠いものに見えるからである。

教員を辞め浜本先生の元で勉強することを志してから10年余り、私は国語教育の実践をなんとか理論化しようと努めてきた。教師は自分の授業がうまくいったかどうか、自分で

はなかなか説明できない。教員当時も今も、自分の授業は直感でしか語れない。それは、多くの教師が実感していることであると思う。私は、授業がうまくいくための理論を求め、もっぱら言語学のさまざまな理論から学んできた。そのことは間違っていないと思うし、日本の国語教育が、世界の言語学の研究の潮流から全く取り残されている事態をかえていかなければならないと言う気持ちは今も変わっていない。

けれど、論文をまとめながら、言語学的な研究ではどうしても足りないことを私は明確に意識していった。そのことは、ずっと前からわかってきたことだ。教員をやっている当時から、いや、もっと昔の学生時代に演劇をやっているところから、私は、人間の行動やコミュニケーション、心的作用が、言語や意識のような表層のものだけで動かされるわけではないことを、知っていた。人間の心の深い部分に触れるためには、言語がいかに無力かを思い知らされてきた。

もう一つ感じていたのは、学校で国語科を教えることの空しさである。国語科授業の理論や実践の本を読むと、「子どもがこんなに変わった。できなかったことがこんなにできるようになった。こうすればできるようになる。変わるんだ。」といった言葉のオンパレードである。私は読むたびに、悲しくなっていた。生まれてからこのかた、私たちは日本語という母語に何千時間何万時間も触れている。学校の国語の時間などそれに比べれば羽毛の軽さである。そんなわずかな時間で、私たちに染みつけた母語の使い方を変えたりよくしたりできるはずがない。そんなことは、普通の感覚で教壇に立っている教師たちはみんな知っていることだ。

ならば、学校の国語の時間は無駄なのか。そうではない。しかし、今までの考え方はだめなのではないか。1時間1単元1学期1年の国語の学習が、たとえ時間数ではわずかなであっても、その子どもの一生涯の言語生活に少しは響くような授業ができなくては、甲斐

がないのではないか。そのためにはどうすればいいか。目先の目標に到達したかどうかにとらわれている間は、そんなことは不可能ではないのか。

論文をまとめながら、人の生涯に少しはい影響を与えることができる国語の授業はどうしたら作れるのか考えるようになっていった。そのためにはまず、その人の（いま—ここ）の言語とその深層にある意識・無意識部分の現況をしっかりと見極めなければならぬと思うようになった。その人との、意識と無意識の全部を含み込んだ（ことば）の、現在の有りよう（生態）とその生涯にわたる変容（生態史）に迫り、できればよりよい方向に変容する（学び）ように、学校の国語教育がお手伝いできるようなればよい。

こうしてわたしは、「ことばの学び生態史研究」という概念をいだいて持つようになった。けれど論文をまとめている間は、このようなことは考えてはいけなかった。ただでさえわけがわからない文章がますますわからなくなる。ようやく論文執筆から解き放たれ、私は、考えをじっくり深めようと、「浜本詣で」を続けていた。

浜本先生の書齋は宝の山であった。文献リストを作ることは、先生の思索の跡をたどることができ絶好の機会であった。ずっと、新しいことばかり追い求めていた私は、全てが新鮮だった。「先生、この文献は何ですか？」

「ああ、それはね……」先生、この人は誰ですか？」「ああ、その人はね……」歴史的なことなど全く知らない私は、文献にまつわる先生のお話が、この上もなく楽しく勉強になった。

ある日私は、「ことばの学び生態史研究」の考えについて先生に思い切って話してみた。自分でも固まり切れていない考えを聞いた先生は、本棚から「児童の言語生態研究」を持ってこられたのである。

「なんばくんと似たような考えを持った人たちがいるよ」

「え？……ほんまや。『生態』って書いてある……。新しい研究会なのですか？……違うわ。20年も前からやっているんや……」

「この会を主宰しておられた上原先生は、広島大学の出身なんだよ。」

「え？上原先生……どこかで聞いたことがある……あ、学会のシンポジウムの記録を雑誌で見ました。」

「勉強してみてごらん」

浜本門下生は、「……てごらん」という浜本先生の言葉が、「……やれ。」という命令形であること、そしてそれは自分の研究や人生を大きく変えるものであることを身にしみて知っていた。ただ、私は先生の言葉が出る前から、心に決めていた。「この会を追いかけよう。できるだけゆっくり追いかけて」と。

インターネットでこの会のこと、上原先生

のことを調べまくった。そして、あるホームページにでくわした。そこには、「児童の言語生態研究会」のことや上原先生のことの詳細に記されていた。「ことばの学び生態史研究」など、誰もやっていない。国語教育に言語学を持ちこもうとがんばってきたように、今度も私は孤独に研究していくんだ、と思っていた私に、大きな光が射し込んだのだ。私はようやく、児童態の入り口にたどり着いた。

その年の12月、私は、児童の言語生態研究会の合宿に参加していた。

#### ※編集部注

難波博孝（なんば・ひろたか）

広島大学大学院助教授。教育学博士。

専攻 国語教育。児童文学。テキスト言語学。

著書

『帝国の玩具としてのSAMBO』

（共著。『児童文学研究』1995）

『漸近線としての国語・日本語教育』

（『日本文学』1999）

『作品の力 教材の力』

（共著。教育出版2000）

『子どもの文化を学ぶ人のために』

（編著。世界思想社）

臨床国語研究会代表